

女子大学生の自己受容を測定する(3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4524

女子大学生の自己受容を測定する (3)

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

要約

川上 (2017, 2018) は、女子大学生を対象に複数の自己受容尺度を統合してデータを収集した。このデータの因子分析結果に基づき、川上 (2017, 2018) では、“弱みのある自分の受け容れ”、“強みのある自分の受け容れ”、“リセット希求のなさ”、“自己価値”、“自律性の受け容れ”、“対処能力への自信”の6因子が抽出され、さらに、これらに対応する下位尺度を構成する全17項目からなるコンパクトな自己受容尺度 (SACCS: Self Acceptance Compact and Comprehensive Scale) が提案された。本研究では、この自己受容尺度と自己愛的脆弱性 (上地・宮下, 2009)、仮想的有能感 (速水・木野・高木, 2004) を同時に実施し、その関係について吟味した。その結果、SACCS 下位尺度と自己愛的脆弱性との間には概ね負の相関が、SACCS 下位尺度と仮想的有能感との間には、無相関あるいは負の相関が認められた。

キーワード: 女子大学生, 自己受容, 自己愛的脆弱性, 仮想的有能感

I 問題と目的

自己受容は心理臨床において重要な概念の一つであり (春日, 2015)、“カウンセリングを受けるクライアントの達すべき目標の一つ” (菱田, 2002)、あるいは、成熟したパーソナリティや心理的健康の一指標 (板津, 1994; 春日, 2015; 鈴木, 2010) ともされている。自己受容は端的に言えば“自己を受け容れること”ではあるものの、認知を含めるのか否か、良い・悪いの評価についてどのように扱うのか、といった様々な点において、研究者によってその見解が異なっている。こうした事態を反映し、現状では多くの研究者により尺度が提案され、使用されている (たとえば藤川・大本, 2015; 藤原・菅原, 2010; 宮沢, 1987 など)。

そこで川上 (2017) は、自己受容を、「良い面も悪い面も含めて、自己のありのままを受け容れ、自己を信頼していること、またそうしようとしていること」としたうえで、複数の自己受容尺度を統合して包括的な自己受容尺度を構成するこ

とを意図し、質問紙調査を実施した。藤原・菅原 (2010)、櫻井 (2013)、藤川・大本 (2015)、森下・三原 (2015)、笹川 (2015) の5つの尺度を構成する項目、計59項目を1つの質問紙として構成し、238名の女子大学生を対象にデータを収集した。因子分析の結果、「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット希求のなさ」「自己価値の受け容れ」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の6因子が抽出された。さらに、川上 (2017) は、この包括的な自己受容尺度を、できるだけコンパクトな項目で構成し、測定が簡便に行える尺度を提案することを目的とし、より少ない項目での尺度構成を行なった。その結果、川上 (2017) では、上記6因子に対応する下位尺度を構成する全17項目からなるコンパクトな自己受容尺度 (短縮版) を提案している。

一方、自己を価値あるものと感じようとし、それを他者に認めてもらおうとする傾向 (上地・宮下, 2005) として、自己愛を上げることができる。

自己愛的人格に共通する問題として、過大な理想自己と卑下された自己 (devalued self) の並存が指摘されており (上地・宮下, 2009), こうした観点からも、自己愛の問題と自己受容の問題とは大きく重なる問題であると言える。

Gabbard (1989, 1994) は、自己愛性人格障害が2つの異なるタイプを両極とする連続体であるとの考え方を提唱している。すなわち、誇大的・自己顕示的で他者の反応に鈍感な無自覚型 (oblivious type) と、他者の反応に過敏で、注目されることを避ける過敏型 (hypervigilant type) の2つである。従来の自己愛研究においては、誇大的・自己顕示的な自己愛が問題とされることが多かったが、上地・宮下 (2005) は、過敏性・脆弱性に焦点を当てることの意義を論じている。それは、日本における自己愛の障害については、過敏型に近い事例が多いとされ (福井, 1998), 不登校やアパシーとの関連も指摘されている (下山, 1996) からである。そして過敏型自己愛傾向は、理想自己と現実自己との乖離、自尊感情の低さ、対人恐怖傾向と一定の関連を有している (上地・宮下, 2009) とされている。そこで本研究では、上地・宮下 (2009) による自己愛的脆弱性の尺度を用い、この自己愛的脆弱性と自己受容との関連について検討する。自己愛的脆弱性は、自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること (上地・宮下, 2009) を指し、親を含む重要な他者が本来的自己への承認・賞賛や感情緩和を十分に与えてくれないとき、自己愛的脆弱性が生じる (上地・宮下, 2009) とされている。以上より、自己愛的脆弱性については、自己受容との関連において、負の相関が認められると予想される。

さらに、自己愛と関連した概念として、近年では、仮想的有能感が注目されている。仮想的有能感 (あるいは他者軽視に基づく仮想的有能感) とは、速水ら (2004) によれば、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる

有能さの感覚」と定義されている。

速水ら (2005) は、この仮想敵有能感と自己愛的有能感、Rosenberg (1965) による自尊感情尺度の日本語版 (山本ら, 1982) との関連について、検討を行っている。自己愛的有能感とは、小塩 (1998) が自己愛を構成する一つの要素として挙げた「優越感・有能感」に相当し、自己の重要性に関する誇大な感覚や自分を過大評価し、時には自慢やうぬぼれを示すこととされている。速水ら (2005) は、「私はもっと認められてよい人間だと思う」、「私は他人から悪口を言われるような人間ではないと思う」、「私は、どんな人にも有益なアドバイスができると思う」の3項目で自己愛的有能感を測定した。相関分析の結果、仮想的有能感は従来からの自尊感情尺度 (山本ら, 1982) とは無相関であった。さらに、仮想的有能感と自己愛的有能感尺度の相関は $r = .31$ 、自己愛的有能感と従来からの自尊感情尺度の相関は $r = .34$ であり、いずれも 0.1%水準で有意であった。したがって、仮想的有能感と自尊感情は独立しているが、自己愛的有能感とその間に位置付けられると、速水ら (2005) は結論づけている。さらに速水ら (2005) は、彼らの研究においての自尊感情を、「真の有能感」であると想定したうえで、「仮想的」有能感ではなく、真の有能感 (自尊感情) を持つことが適応的な状態であるとも想定している。実際、速水ら (2005) の研究2においては、仮想的有能感および自尊感情の尺度得点の平均値を基準に調査対象者を高低2群に分け、これらの組み合わせにより4群を構成した分析が実施され、仮想的有能感が低く自尊感情が高い場合に、怒りに対する適応的な対処能力を持つことが示されている。

こうしたことから、仮想的有能感と自己受容の関連については、自己受容が速水ら (2005) の言うような「真の」受容であるとするならば、仮想的有能感と自己受容とは無関連、あるいは、自己受容の高さによってむしろ仮想的有能感は抑えられるのではないかと想定される。

以上より、本研究では、川上 (2017, 2018)

による自己受容尺度 (SACCS: Self Acceptance Compact and Comprehensive Scale) と自己愛的脆弱性, および仮想的有能感の尺度を同時に実施し, それらの関連について検討することを目的とする。

II 方法

調査時期

調査は 2018 年から 2019 年にかけて実施された。

調査対象者

大阪樟蔭女子大学・日本福祉大学・京都橘大学大学院に所属する大学生・大学院生女子 155 名 (平均年齢 19.7 歳, $SD = 1.03$) が調査に参加した。

質問紙の構成

本研究では, 川上 (2017, 2018) で作成された自己受容尺度 (SACCS), 上地・宮下 (2009) による自己愛的脆弱性尺度 (NVS 短縮版), 速水ら (2005) による仮想的有能感尺度 (速水ら, 2004) の 3 つの尺度による測定が実施された。

自己受容については, 川上 (2017) に基づく 59 項目が使用され, これらのうち, 川上 (2018) による自己受容尺度 (SACCS) として, 「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット希求のなさ」「自己価値の肯定」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の 6 つの下位尺度を構成する合計 17 項目が使用され, 分析に用いられた。

さらに自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し, 心理的安定を保つ力の脆弱性 (上地・宮下, 2009) を測定する自己愛的脆弱性尺度 (NVS 短縮版: 合計 20 項目) を用い, 5 件法 (1: まったくない, 2: めったにない, 3: たまにある, 4: ときどきある, 5: よくある) で測定が行なわれた。上地・宮下 (2009) に倣い, 「自己顕示欲性」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の 4 下位尺度が構成され, 分析に用いられた。

最後に, 仮想的有能感については, 速水ら (2004) に基づき, 11 項目からなる尺度 (ACS)

を用い, 5 件法 (1: まったくあてはまらない~ 5: 非常によくあてはまる) で測定が行われた。

なお, 本研究における質問紙には, 山田・岡本 (2006) が用いた, 自己による自己受容に関する 15 項目も含まれていたが, この尺度については, 本研究では分析を実施しない。

手続き

心理学系講義の講義時間中に担当教員が質問紙を配布し, 調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。調査対象者には個人ペースでこれらに回答することが求められた。回答所要時間は約 15 分であった。

III 結果と考察

まず, SACCS (川上, 2018) については, その因子構造の安定性を確認するため, 本研究におけるデータと川上 (2018) のデータとを合併して (390 名, 平均年齢 19.3 歳, $SD = 1.18$) 因子分析を行い, 因子の安定性について確認を行なった。17 項目に対して, 因子数を 6 に固定したうえで, 最尤法, プロマックス回転による因子分析を実施した結果, 表 1 に示したように, 川上 (2017, 2018) で得られた結果と同様の安定した因子構造が示された。

本研究で得られたデータに基づき, 自己受容尺度である SACCS (川上, 2018), NVS 短縮版, 仮想的有能感それぞれを構成する下位尺度について, 先行研究に倣い項目を選択し, α 係数を算出したところ, 表 2 の通りとなった。SACCS の下位尺度である自律性の受け容れ ($\alpha = .692$) では, .70 を下回ってはいるが, それ以外の下位尺度については, いずれの下位尺度の α 係数も .750 を超えており, 十分使用に耐えうる尺度構成であると判断された。

それぞれの下位尺度に対応する項目について, 回答の方向に合わせて必要な項目には逆転処理を行った後, 複数項目に対する回答の平均値を算出することにより, 下位尺度得点が算出された。構成された下位尺度について, その平均値および標準偏差を表 2 に示した。

表1 SACCSの因子分析結果(川上(2018)データと合併)

	I	II	III	IV	V	VI
自己価値の肯定						
私は生きていても仕方がない(逆)	.965	-.042	.002	.039	.022	-.043
私は生まれてこない方がよかった(逆)	.924	-.005	-.007	.028	-.020	.034
私は生きる価値のない人間である(逆)	.857	.039	-.019	-.019	-.031	.009
リセット希求のなさ						
私は自分とは違うだけか別の人になりたい(逆)	.079	.849	.041	-.038	.018	.075
「今とは違う自分だったらなあ」と思う(逆)	-.160	.677	-.076	.101	-.030	-.122
これまでの人生をやり直したい(逆)	.087	.660	.073	-.015	-.012	.035
強みのある自分の受け容れ						
私は自分の長所がわからない(逆)	.043	.039	-.846	-.003	.078	.038
自分の優れている部分を受けいれている	.068	.162	.789	-.073	.230	-.003
私には人に誇るものが何も無い(逆)	.099	.143	-.660	-.043	.089	.024
自律性の受け容れ						
私は自分のことは自分で解決する	.071	.034	-.055	.777	-.050	-.107
私は自分で決めたことには責任をもつ	-.080	.078	-.050	.612	.139	.052
私は困難にぶつかってもそれを克服できる	.063	-.097	.097	.573	.006	.083
弱みのある自分の受け容れ						
"自分の弱いところも自分の一部として認めることができる"	-.038	.033	-.020	-.007	.863	-.026
現在の自分を受けいれている	.026	-.056	.107	.052	.753	-.044
私は平凡かもしれないがそんな自分を好きだと思える	-.087	-.178	.059	-.013	.460	.140
対処能力への自信						
私は将来何が起ころうと自分なりにやっていける	.020	-.018	-.074	-.062	.005	1.048
将来何か問題が起こったとしても、何とか対処していけるという自信がある	-.070	.032	.140	.218	-.080	.531
	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.609	-.586	-.294	-.594	-.424
II		—	-.558	-.357	-.588	-.543
III			—	.540	.721	.632
IV				—	.532	.639
V					—	.650
VI						—

次に、SACCS 下位尺度間の相関係数を算出し(表3)、川上(2018)の結果と比較した。その結果、川上(2018)とほぼ同等の相関行列が得られたことが確認された。

さらに SACCS 下位尺度と自己愛的脆弱性尺度下位尺度との間の相関係数を算出し、表4に示した。その結果、自己顕示抑制および承認・賞賛

過敏性については、SACCS 下位尺度のいずれもと有意な負の相関を示した。すなわち自己顕示に恥意識が伴いやすく、自己顕示を不自然に抑制する傾向、また、他者からの承認や賞賛に過敏で、それが得られないと傷つく傾向については、自己受容が低いほど高くなることが示された。

また、自己緩和不全については、強みのある自

表2 本研究で用いられた各下位尺度の α 係数, 平均値および標準偏差

	尺度	α 係数	平均値	標準偏差
SACCS	弱みのある自分の受け容れ	.855	3.31	0.98
	強みのある自分の受け容れ	.783	2.99	1.04
	リセット希求のなさ	.787	2.44	1.09
	自己価値の肯定	.942	3.64	1.25
	自律性の受け容れ	.692	3.46	0.79
	対処能力への自信	.775	3.14	0.97
自己愛的脆弱性	自己顕示抑制	.839	3.50	0.91
	自己緩和不全	.823	3.22	0.94
	潜在的特権意識	.837	2.82	0.83
	承認・賞賛過敏性	.845	3.34	0.94
	仮想的有能感	.865	2.67	0.71

表3 SACCS 下位尺度間の相関係数

	弱みのある 自分の受け容れ	強みのある 自分の受け容れ	リセット 希求のなさ	自己価値 の肯定	自律性の 受け容れ	対処能力 への自信
弱みのある / 自分の受け容れ	—	.725 **	.575 **	.579 **	.448 **	.612 **
強みのあ / 自分の受け容れ	.725	—	.538 **	.607 **	.399 **	.576 **
リセット 希求のなさ	.575	.538 **	—	.581 **	.278 **	.465 **
自己価値の肯定	.579	.607 **	.581 **	—	.165 *	.414 **
自律性の受け容れ	.448	.399 **	.278 **	.165 *	—	.575 **
対処能力への自信	.612	.576 **	.465 **	.414 **	.575 **	—

表4 SACCS 下位尺度と自己愛的脆弱性, 仮想的有能感との相関係数

	弱みのある 自分の受け容れ	強みのある 自分の受け容れ	リセット 希求のなさ	自己価値 の肯定	自律性の 受け容れ	対処能力 への自信
自己顕示抑制	-.515 **	-.457 **	-.388 **	-.470 **	-.273 **	-.439 **
自己緩和不全	-.239 **	-.150	-.319 **	-.248 **	-.322 **	-.209 **
潜在的特権意識	-.245 **	-.137	-.315 **	-.167 *	-.137	-.070
承認・賞賛過敏性	-.523 **	-.467 **	-.548 **	-.417 **	-.382 **	-.402 **
仮想的有能感	-.142	-.089	-.294 **	-.269 **	-.011	.048

分の受け容れを除く SACCS の下位尺度と有意な負の相関を示した。すなわち、不安や抑うつを自分で調節する力が弱く他者にその緩和を期待する傾向については、概ね自己受容が低いほど高くなるが、自分の強みについて、それを認識し、受け容れているのかどうかとは関連が認められなかった。SACCS の下位尺度の中でも、対処能力への自信は、-.20 程度の相関係数を示しており、比較的關係が弱いことも併せて考えると、強みのある自分の受け容れや対処能力への自信は、不安や抑うつに対応した「守りの」自己受容というよりも、「攻めの」自己受容を測定していることを思わせる。ここで言う「守りの」自己受容とは、自分は「ダメではない」あるいは「大丈夫」といった、自分が、マイナスではないという形で受容することであり、「攻めの」自己受容とは、自分に「価値がある」あるいは「イケている」といった、新しいことへの挑戦をも支えるような、自分がプラスであるという形を受け入れることである。

さらに潜在的特権意識については、弱みのある自分の受け容れ、リセット希求のなさとのみ、-.20 以上の負の相関を示している。潜在的特権意識は、他者に自分への特別扱いや特別の配慮を求める傾向であり、こうした配慮を強く願うものの、それが得られない現実が、弱みのある自分を受け容れ難く感じさせたり、リセット希求に繋がったりする傾向が示唆される。

一方で、仮想的有能感と SACCS 下位尺度との相関については、リセット希求のなさおよび自己価値の肯定と仮想的有能感の間にも、有意な負の相関が示された。強みのある自分の受け容れと仮想敵有能感の間には、相関が認められなかったことから、強みのある自分を受け容れることは、必ずしも仮想的有能感につながるものではないことが示された。このことは、SACCS 下位尺度として測定される、強みのある自分の受け容れが、速水ら (2005) の言うところの「真の」受容であることを示しているのだと考えられる。同様に、弱みのある自分の受け容れ、自律性の受け容れ、対処能力への自信についても、仮想的有能感との

有意な相関は認められず、仮想的有能感とは独立した概念であることが見て取れる。

その一方で、仮想的有能感を持つことは、リセット希求を持っていることや、自己価値を肯定できないことと関連していることが示された。本来、自己の価値を認め、リセット希求を持たないことが、仮想的有能感に繋がるのではないかとも考えられるが、これも速水ら (2005) の言うように、本来の自己価値、本来のリセット希求のなさは、むしろ「仮想的な」有能感とは相反するものであるのかもしれない。あるいは、仮想的な有能感が、本来有能である自分が、「現実のこの世界ではそれが評価されていない、認められていない」といった不満感と繋がることによって、これを具現化するための思考装置として「リセット希求」につながる可能性も考えられる。

以上のように、SACCS で測定される自己受容と自己愛的脆弱性、および仮想的有能感との関係について吟味してきたが、本研究では、これらの因果関係にまで踏み込んで解釈することはできない。そもそも、本研究の問題意識の根底には、現代女子大学生が抱える「しんどさ」や「生きづらさ」の背後には、彼女らの自己受容の低さがあるのではないかという、大学教員としての感覚がある。今後は、彼女らとの関わりの中で、適正な自己受容の高さが得られるような働きかけを考えていく上でも、因果関係にまで踏み込んだ解釈や、それを可能にするデータの収集が不可欠であると考えられる。

引用文献

- 藤川順子・大本久美子 (2015). 高校生の自己受容・他者受容と親との関わりとの関連. 大阪教育大学紀要第4部門教育科学, 64, 81-92.
- 藤原梢・菅原正和 (2010). 理想・現実自己の齟齬と自己受容の心理学. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 9, 125-140.

- 福井 敏 (1998). 誇大的な自己—自己愛性障害. *こころの科学*, **82**, 75-86.
- Gabbard, G.O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.
- Gabbard, G.O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version*. Washington: American Psychiatric Press.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **51**, 1-8.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感—自尊感情との比較から—. *感情心理学研究*, **12**, 43-55.
- 菱田陽子 (2002). 現代青年の自己受容に関する分析. *北陸学院短期大学紀要*, **34**, 179-196.
- 板津裕己 (1994). 自己受容性研究の発展 (1) — 評定法を中心とした自己受容性測定法の整理 —. *駒沢社会学研究*, **26**, 1-30.
- 春日由美 (2015). 自己受容とその測定に関する一研究. *南九州大学人間発達研究*, **5**, 19-25.
- 川上正浩 (2017). 女子大学生の自己受容を測定する. *大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要*, **11**, 27-39.
- 川上正浩 (2018). 女子大学生の自己受容を測定する (2). *大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要*, **12**, 31-39.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. *パーソナリティ研究*, **14**, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. *パーソナリティ研究*, **17**, 280-291.
- 宮沢秀次 (1987). 青年期の自己受容性の研究. *青年心理学研究*, **1**, 2-16.
- 森下正康・三原まどか (2015). 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響: 内的作業モデルと自己受容を媒介として. *発達教育学研究: 京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要*, **9**, 31-42.
- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. *教育心理学研究*, **46**, 280-290.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 櫻井英未 (2013). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係. *日本女子大学大学院人間社会研究科紀要*, **19**, 125-142.
- 笹川果央理 (2015). 自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討—自己価値の随伴性から. *パーソナリティ研究*, **24**, 112-123.
- 下山晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望. *教育心理学研究*, **44**, 350-363.
- 鈴木潤也 (2010). 自己受容概念の再考—「ありのまま」の自己受容についての検討. *青山心理学研究*, **10**, 49-61.
- 山田みき・岡本祐子 (2006). 現代青年の自己受容—自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から—. *広島大学大学院教育学研究科紀要第三部*, **55**, 339-348.
- 山本眞理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, **30**, 64-68.

